

令和2年度 嶺北特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習支援 (小学部 低学年)	a 児童の自ら人や物に関わる姿を引き出すための教師の支援(児童への働き掛けや関わり方、声掛けの仕方、環境設定)について教師間で検討し、共通理解を図る。	<p>「取組指標」(A、B)の合計は100%であり、目標指数は達成できた。昨年度から引き続き学部研究で発達段階に応じた関わり方等についての研修を行ったことの結果と思われる。「成果指標」(A、B)の合計も88.0%であり、目標指数は達成できた。学んだことを実践に生かすことができたのではないかとと思われる。</p> <p>「取組指標」でAを選んだ15名のうち14名が「成果指標」でAを選んでおり、取組の成果を実感していた。また、「成果指標」でAを選んだ17名のうち12名が特に配慮した事柄について、「声掛け」や「働き掛け」を選んでいたので、教師の声掛けや働き掛けが与える児童への影響の大きさを確認することができた。</p> <p>「満足度指標」も96.6%であり、目標指数は達成できた。Aを選んだ26名のうち22名が、特に適切であった支援について「声掛け」や「働き掛け」を選んでおり、教職員と保護者の実感がほぼ一致していたのではないかと考える。</p>	<p>今年度は回答しやすいようにアンケートの形式を見直したことで、保護者の具体的な回答が得られた。引き続き、教師間の研修に努め、授業場面だけでなく学校生活全体について、児童の発達段階に応じた教師の支援を充実させていきたい。</p>
	b 一人一人の発達段階や実態に基づいた目標を設定し、その目標を達成するための課題設定に取り組む。	<p>「取組指標」(A、B)の合計は100%であり、目標指数は達成できた。「成果指標」(A、B)の合計も91.7%であり、目標指数は達成できた。D(あまり達成できなかった)の回答は0%であった。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は96.5%であり、適切な課題設定であったのではないかと考える。</p>	<p>今後も、客観的なアセスメントと日常の観察による児童の発達段階の把握に努め、さらに保護者や本人のニーズを踏まえたうえで、適切な課題設定、および目標達成に取り組んでいきたい。</p>
2 教育課程 学習支援 (小学部 高学年)	a 人に伝える力を高めるための支援方法について検討し、実践する。	<p>「取組指標」(A、B)の合計は95.4%、「成果指標」(A、B)の合計は86.4%であり、どちらも目標指数は達成できた。児童の実態を正確に把握するため、数種類のアセスメントを学年全体で実施したり、研究会で児童それぞれの最近接の課題について定期的に話し合いをしたりしたことが、教師の意識を高める結果につながったと考える。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は96.8%であり、目標指数は達成できた。C(あまり検討・実践していなかった)の回答は3.2%であった。</p> <p>「取組指標」(A)の割合(13.6%)と、「満足度指標」(A)の割合(74.2%)とに大きな差があった。人に伝える力の捉え方について、教師間で共通理解が必要であると考える。</p>	<p>どの指標においても目標指数は達成できたが、これを継続するためには、以下の4点が大切と考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①児童の実態を客観的に捉えるため、数種類のアセスメントを有効的に活用する。 ②児童の継続性のある学部(高学年)単位の長期目標と、それを実現するための毎年の短期目標を設定し、これらを念頭に置いて児童の伝える場面を意識した授業実践を行う。 ③保護者との懇談において、児童の様子を的確に伝えたり保護者から聞き取ったりして、十分に共通理解を図る。 ④教師間で年度当初に人に伝える力について共通理解し、十分な話し合いと教材作り等の授業準備の時間を確保する。
	b 集団に自ら参加しようとする意欲を引き出す指導の工夫に取り組む。	<p>「取組指標」(A、B)の合計は90.9%、「成果指標」(A、B)の合計は95.5%であり、どちらも目標指数は達成できた。C(あまりできなかった、あまり見られなかった)と回答した割合は、「取組指標」で9.1%、「成果指標」で4.5%であった。今年度は学級単位での活動が中心となり、学年全体の大きな集団で活動する機会が少なかった。また、基本的な身辺自立や生活習慣の確立を重点目標としている児童もおり、集団活動に対する意欲を引き出す機会を持つことができなかったと考える。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は96.7%であり、目標指数は達成できた。C(あまり行っていない)の回答は3.3%であった。児童の集団活動への参加意欲を引き出す支援方法について、保護者と共通理解を図り、継続して研究していく必要があると考える。</p>	<p>「取組指標」「成果指標」共に目標指数は達成できたが、集団活動を好まなかったり、身辺処理に時間が掛かったりして、現時点では集団活動に参加することが難しい児童もいる。このような児童に配慮しつつ、社会で自立できる児童の育成を目指して、以下の2点に留意することが大切と考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①児童の実態を把握し、個に応じた集団の規模、集団活動への意欲を引き出す声掛けや支援の方法を学部全体で工夫する。 ②保護者との懇談で、集団活動に向けてどのような支援が必要か話し合い、共通理解を図る。
3 教育課程 学習支援 (中学部)	a 生徒の発達段階やニーズを踏まえて教師間で協議し、具体的な目標を設定したり、支援方法を計画したりする。	<p>「取組指標」(A、B)の合計は100%、「成果指標」(A、B)の合計は80.7%であり、どちらも目標指数は達成できた。教師の目標設定や取組はおおむね適切で、指導に一定の成果があったと考える。しかし、「取組指標」(A:十分にできた)の回答は34.6%、「成果指標」(A:どの教科・領域においても、十分に達成できた)の回答は11.5%と少ない。また、「成果指標」(A、B)の合計は80.7%で目標指数を上回っているものの境界線値であった。将来に向けた中・長期的な種々の目標を設定し、継続的な支援や指導に取り組んでいるため、今年度の結果のみで判断すると、十分に成果があったとは言えないと感じていると推測する。</p> <p>「満足度指標」の数値からは、ほとんどの保護者が子どもの成長を感じていると思われる。「社会生活面」で28.1%、次いで「学習面」「日常生活面」「身体面」の順であった。</p>	<p>目標指数は達成できたが、教師は十分に目標設定ができ、十分な成果があったとの気持ちをあまり持つことができていない。今後は、複数の教師で、より具体的、直接的な目標を立て、生徒の重点指導項目について、一つ一つ達成した成果を確認し合うようにしたい。</p> <p>保護者には、子どもの変化や成長を理解しやすいように、日々の連絡帳や学部だより、懇談などの機会を通して、実態や課題、目標などを共有し、写真や映像なども活用して学校での具体的な様子を分かりやすく伝え、積極的な発信できるようにしていきたい。</p>
	b 生徒の実態に応じ、体育大会や文化祭などの行事に向け、集団の中での役割や協力を意識した授業を行う。	<p>「取組指標」(A、B)の合計は100%、「成果指標」(A、B)の合計は92.3%であり、どちらも目標指数は達成できた。しかし、「取組指標」(A:十分にできた)の回答は34.6%、「成果指標」(A:十分見られた)の回答は19.2%と多くはなく、「成果指標」(C:あまり見られなかった)の回答も2件(7.7%)であった。生徒の実態によって、集団参加や集団の中での役割、協力という観点で学習活動を設定し、指導する難しさがあったのではないかと推測する。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は88.6%であり、目標指数は達成できた。C(あまり感じられなかった)の回答が4件(11.4%)あったが、D(まったく感じられなかった)の回答は0件(0%)であった。コロナ禍で、保護者に対して、実際の姿を見ていただく機会は少なかったが、連絡帳や学部だより、懇談時に写真や動画等を活用して取組の様子や活躍の様子、役割を果たしたり協力したりする様子を紹介できたことが奏功したと思われる。</p>	<p>「取組指標」「成果指標」ともに目標指数は達成できたが、個別的に考えると、集団活動への参加の意義や方法、集団における役割や協力をどのように考えるかが課題となる生徒もいる。生活年齢とともに、各生徒の実態に配慮しつつ、生徒一人一人の集団参加のねらいを適切に設定して、さらに成長や自立を促していきたい。そのために、生徒の実態をより詳細に把握し、集団活動への意欲を引き出したり、役割や協力の場面を生み出したりできる支援方法を検討するようにする。また、保護者との懇談などの機会でも、集団での活動に向けてどのような支援が必要かを話し合い、共通理解を図るようにする。</p>

<p>4</p> <p>教育課程 学習支援 (高等部)</p>	<p>a 卒業後に必要な力を身に付けられるよう、生徒一人一人に応じた適切な課題を設定し、指導を行う。</p> <p>「取組指標」(A、B)の合計は93.9%、「成果指標」(A、B)の合計は87.9%であり、どちらも目標指数は達成できた。しかし、C(あまりできなかった)の回答は、「取組指標」で6.1%、「成果指標」に至っては12.1%あり、今年度から取り組み始めたアセスメント等が、自ら働く意欲を持たせる活動設定や支援にうまく生かされなかったのではないかと考える。アセスメントについては、内容や使用方法について問題点や改善点が挙げられているので、より良いものにするために今後も継続して研究していくことが必要である。</p> <p>「満足度指標」については、E(変わっていない)の回答は6.3%であり、目標指数(10%以下)は達成できた。保護者が我が子の成長を感じているのは、「作業スキル面」が最も多く、次いで「基本的な生活習慣面」であった。「作業スキル面」で成長を感じている保護者の割合が1番高くなったことは、日頃から作業の様子を丁寧に伝える等の取組の成果であると考えられる。</p>	<p>生徒一人一人が卒業後に必要な力を身に付けられるようにするためには、以下の2点が大切と考える。</p> <p>①生徒個々の実態や適性を捉えて目標を設定し、授業実践を行う。</p> <p>②現場実習等での第三者の評価を含めて実践の見直しや指導の改善に取り組み、成果につなげる。</p> <p>今後、新教育課程への移行とともに、客観的なアセスメントと実態や適性の正確な把握に努めていきたい。また、保護者との日々の様子のやり取り、実習評価等を踏まえての実態の共通理解等、関係を密にし、信頼関係を築きながら個に応じた適切な指導の継続に取り組みたい。</p>
	<p>b 生徒の働く活動について、活動内容や課題設定、生徒の様子について定期的に検討する。</p> <p>「取組指標」(A、B)の合計は87.9%、「成果指標」(A、B)の合計は93.9%であり、どちらも目標指数は達成できた。C(あまりできなかった)の回答は、「取組指標」で12.1%、「成果指標」で6.1%であった。日々の授業についての振り返りや検討会等の参加が十分にできないことがあったようではあるが、おおむね生徒の様子から授業内容を工夫し、課題設定や支援内容の見直し等を行いながら、日々の授業実践、授業改善を行うことができたことが伺える。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は100%であった。日々の連絡帳や懇談などの機会に連絡を密にすることで信頼関係が築かれ、共通理解が図られている成果であると考えられる。</p>	<p>教師の指導力向上に向けて、日々の実践から生徒の実態を踏まえた授業改善を適切に行うことができるようにするため、教師間の十分な話し合いと教材作り等の授業準備の時間を定期的に確保できるようにしたい。また、保護者には、いろいろな活動場面での実態等を、積極的に発信できるようにしたい。</p>
<p>5</p> <p>教育課程 学習支援 (訪問学級)</p>	<p>a 日々、一人一人の健康状態を把握するとともに、感染予防に努めながら、適切な授業時間の中で、丁寧に関わる。</p> <p>「取組指標」「成果指標」「満足度指標」すべてにおいて、目標指数は達成できた。「取組指標」がすべてB回答(おおむねできた)であったことは、児童生徒一人一人にかかる日常の医療的ケアや処置などの時間や頻度が増え、感染予防のために授業を行う順番の調整も必要であったため、授業時間の調整が困難であったことによると思われる。また、「成果指標」がすべてB回答(おおむねできた)であったことは、必要な情報を得て授業時間を設定しても、急な医療的ケアや処置が必要となり、授業時間を十分にとることが難しいことを表している。</p> <p>「満足度指標」がすべてA回答(丁寧に関わっていた)であったことは、訪問日より学習の記録などを通しての結果であると考えられる。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため面会禁止が続いており、保護者と話をすることができなかったため、授業の様子を伝える方法について工夫が課題であった。</p>	<p>児童生徒の状態把握のため、朝の観察を教師の目で十分に行い、そのうえでリーダー看護師や担当看護師、必要に応じて医師との情報交換を行い共通理解を持つことは大切なことであり、今後も継続して行っていきたい。</p> <p>授業時間については、感染予防の点から、同病室の状況や病棟全体の状況にも目を向け、医療側との連絡調整を慎重に行いながら、できるだけ一人一人の児童生徒に応じた授業時間を設定し、落ち着いて授業に取り組むことができることを念頭に入れて進めていきたい。</p> <p>保護者との連携については、必要な電話連絡時に、児童生徒の様子を伝えたり、書類の郵送時に個別のミニ通信などを入れたりするなどして、児童生徒の様子がより伝わりやすい工夫を行ってきたい。</p>
	<p>b 人や物の存在に気付き関わろうとする学習内容や教材、支援の方法を考え実践する。</p> <p>「取組指標」(A、B)の合計は33.3%であり、目標指数を達成することができなかった。今年度、ビデオ映像をもとに授業内容や教材、支援について話し合う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止で病棟閉鎖が続いたり、児童生徒の体調不良が長引いたりしてビデオ撮影をする機会が持たず、映像記録をもとにした話し合いができなかった。日々、教師間では児童生徒の指導について話し合っているが、ビデオ映像という点から、C(あまりできなかった)の回答が33.3%、D(まったくできなかった)の回答が33.3%という結果になったと思われる。「成果指標」がすべてB回答(時々見られた)であったことは、障がいや重度であり、病状などから学習制限の多い児童生徒の授業の難しさがあることを表している。</p> <p>「満足度指標」がすべてA回答(十分取り組んでいた)であったことは、児童生徒が授業を楽しんだり、何かに気付いたりするという様子を、学習の記録や「訪問日より」などから感じて、教師の取組を評価した結果であると考えられる。</p>	<p>すべての児童生徒について話し合い、実態等の共通理解を図っている。学習内容や教材、児童生徒の様子については、お互いの授業記録を見たり、話し合ったりしているが、授業のほとんどが個別であるため、お互いの授業を見合う機会はほとんどない。そのため、児童生徒からの表出の読み取りの正確性や共通性、関わり方の適切さなどについて、不十分な点があると思われる。定期的に授業の映像を記録し、検討する時間を設定して実践に生かしていきたい。</p> <p>児童生徒一人に複数の教員が授業を行うことについても、検討課題とした。また、訪問担当教員の経験や知識をさらに深めていくためにも、県内の訪問教育担当者会を通して、指導方法や教材などの情報交換を行い、研修や研究誌などを通して県内外の実践から情報を得ていきたい。</p>
<p>6</p> <p>教育課程 学習支援 (寄宿舎)</p>	<p>a 明るくなごやかな雰囲気の中での共同生活の中で、他者と関わり、よりよい人間関係を築くように支援を行う。</p> <p>「取組指標」(A、B)の合計は100%、「成果指標」(A、B)の合計は80.7%で、どちらも目標指数は達成でき、職員は児童生徒の成長を実感している。コロナ禍での難しい生活環境であったが、個に応じた目標を設定し、日々の実践を地道に行うことで、子どもの成長に結びつけることができたと考えられる。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は92.0%で、目標指数は達成できた。保護者は子どもが成長したと判断したことから、共同生活の中でよりよい人間関係を築くという観点で、我が子の変化をとらえていると考える。一方で、4人の保護者が、「成長しなかった」と感じており、ケースによっては個々に設定した目標や支援方法を見直すことも必要である。</p>	<p>「期待したほどは成長しなかった」(中学部1人、高等部2人)、「まったく成長しなかった」(小学部高学年1人)と回答した保護者がいる。今年度は寄宿舎リノベーション工事に伴う利用制限やソーシャルディスタンスが必要な生活の中で、経験を積む機会が例年に比べ乏しくなったことも考えられる。</p> <p>今後、子どもの生活全般を細かく観察し、実態に応じた支援のさらなる工夫を図ってきたい。また、子どもの日々の様子や些細な変化を保護者に細かく伝え、情報交換を密にしなが、丁寧に対応していきたい。</p>
	<p>b 基本的な生活習慣が身に付くように、日常生活の中や毎月のライフタイム(生活指導)の時間の中で、一人一人に応じた支援の工夫に取り組む。</p> <p>「取組指標」(A、B)の合計は96.0%で、目標指数は達成でき、支援の工夫への努力が伺える。「成果指標」(A、B)の合計は100%であり、目標指数は達成できた。基本的な生活習慣を身に付けることができた実感している。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は92.0%であり、目標指数は達成できた。基本的な生活習慣が身に付いたと判断していることから、個に応じた支援の成果を実感できたと考えられる。一方で、4人の保護者が、「あまり身に付かなかった」と感じており、支援のさらなる工夫が必要である。</p>	<p>「あまり身に付かなかった」(小学部高学年1人、中学部1人、高等部2人)と回答した保護者がいる。子どもの生活全般を細かく観察し、一人一人の興味関心の高いことや分かれやすい手段を判断し、その上で視覚支援や支援グッズの活用、日常的な対話やライフタイムなどでのきめ細やかな支援をさらに工夫し、家庭にもつなげていきたい。</p>

<p>7</p> <p>健康・安全</p>	<p>a 保健指導 児童生徒の行動や体調を把握し、教職員間で共通理解を図るとともに、けがの防止や病気の予防に努める。</p>	<p>「取組指標」(A、B)の合計は97.0%、「成果指標」(A、B)の合計は88.9%であり、どちらも目標指数は達成できた。これは、新型コロナウイルスやインフルエンザ等の感染症の情報や対策について、指導用の教材を作成したり校内放送で注意を促したりしたことと考える。また、体重測定後の養護教諭によるミニ保健指導を実施したことや、けがをした際に原因や対応策を検査して改善を促したことも効果があったと考える。C(あまりできなかった)の回答が3.0%であったが、このことについては、どのような手立てが必要か、今後、検討が必要である。</p> <p>「満足度指標」(A、B)の合計は98.2%であり、目標指数は達成できた。しかし、C(あまり取り組んでいなかった)、D(まったく取り組んでいなかった)の回答が合わせて1.8%あり、学校における病気やけがの予防対策では不十分と感じる保護者もいることを意識して今後の業務に生かしていきたい。</p>	<p>新型コロナウイルス感染症については、今後も予断を許さない状況であり、感染予防対策や新しい科学的知見の情報発信を引き続き行っていく。また、病気予防については、児童生徒の状況に合わせた対応がなされているか、学部ごとに状況を確認しながら進める必要がある。さらに、けがの防止については対応策を考え、環境整備が必要な場合は早急に対応するとともに、校内メッセージを活用し、全校で共有して再発防止に努める。</p> <p>保護者に対しては、子どもの健康状態や行動について、連絡帳や電話で伝えて十分に連携を取ったり、お便りを通して学校全体の状況をお知らせしたりするなどして、学校での様子が分かるようにする。また、健康面で気掛かりなことや質問など、気軽に相談できる機会を増やすようにしていきたい。</p>
<p>8</p> <p>生徒支援 進路支援</p>	<p>a 生徒支援(1) 体育大会や文化祭などの行事において、児童生徒の理解に努めるとともに、活動内容の創意工夫をして活動意欲を育てる。</p>	<p>「取組指標」(A、B)の合計は97.1%、「成果指標」(A、B)の合計94.3%、「満足度指標」(A、B)の合計は96.9%であり、昨年同様、高い数値で目標指数は達成できた。特に「満足度指標」においては、70.8%の保護者がA(十分におこなっていた)の回答であった。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、体育大会や文化祭の行事は、平日開催、時間短縮、保護者観覧を限定するという対応をして開催した。また、消毒、健康観察の徹底、ソーシャルディスタンスを取るなどの行動制限もあったが、そのような状況においても、各学部、児童生徒が生き生きと取り組めるような内容を検討して実施した結果と考える。</p>	<p>今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、異例の行事開催となったが、未だ終息の目処が立たない中、大勢が一堂に会する学校行事については、来年度も例年通りに開催できるかの見通しが立たず、そのときの状況を踏まえて判断する必要がある。</p> <p>今年度、文化祭は学部毎に分散して行い、開閉会式はリモートで行うなどの工夫をした。来年度も今年度同様、どのような形式での開催になっても、各学部と指導部が連携し、児童生徒が意欲を持って生き生きと取り組むことができるように、工夫を凝らした企画とスムーズな運営を目指したい。</p>
<p>b 生徒支援(2) 児童生徒の人権意識や規範意識が高まるように心掛ける。</p>	<p>「取組指標」(A、B)の合計は98.6%、「成果指標」(A、B)の合計は99.3%、「満足度指標」(A、B)の合計は97.5%であり、すべてにおいて、高い数値で目標指数は達成できた。教職員が高い人権意識を持って支援を行っていたと考えられる。しかし、C(あまり行っていない)、D(まったく行っていない)と回答した教職員や保護者が、若干ではあったがいたという結果を真摯に受け止めなければならない。</p>	<p>今後も継続して、日々の児童生徒の不適切な行動や発言に気を配るとともに、教職員自身も日々不適切な発言や行動をしないように心掛け、細心の注意を払う必要がある。また、教職員同士においても常に気を付けていかなければならない。人権を守ることは学校教育での基本と考え、これからも、教職員一人一人が常に高い人権意識、規範意識を持ちながら、児童生徒に接するよう努めていきたい。</p>	
<p>c 進路支援 将来の生活への関心・意欲が高まるように、進路に関する情報提供や進路学習の充実を図る。</p>	<p>「取組指標」(A、B)の合計は82.7%、「満足度指標」(A、B)の合計は83.6%であり、目標指数は達成できた。「満足度指標」では、例年、高等部で高い指数が得られることが多いが、今年度はすべての学部で(A、B)の合計が80%を超え、昨年度より高い指数を得た。コロナ禍で保護者対象の進路行事を開催できなかったが、進路通信や進路説明会資料等において進路情報を充実させ発信したことの成果であると考え。</p> <p>一方で、「成果指標」(A、B)の合計は73.3%であり、目標指数を達成することができなかった。特に中学部80.8%、高等部97.0%に対し、小学部低学年58.3%、小学部高学年45.5%で大きな差が見られた。小学部の発達段階では、将来の生活について意識やイメージを持つことや持たせることが難しいことによると考える。しかし、「満足度指標」(A、B)の合計は、小学部低学年で86.2%、小学部高学年で87.1%と高い数値を得ており、教師側の捉え方と保護者の評価にズレがある点にも着目する必要がある。</p>	<p>今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、保護者対象の進路行事が中止になり、進路に関する啓発が十分にできなかったが、「満足度指標」は全学部で高い指数を得ることができた。進路についての情報を充実させて発信し、補った成果であると考え。今後も保護者が必要としている情報を分かりやすくタイムリーに発信していきたい。</p> <p>今年度も、「児童の将来や進路について関心・意欲を高めることが難しい」という課題が小学部教員に見られた。昨年度の学校評価書でも述べたが、「挨拶や返事、友達と一緒に遊ぶ、簡単な係の仕事をするなど、小学部の日々の学習の中で取り組んでいることが将来(進路)につながっており、その力を育てていくことが進路学習の一つである」ということが、教職員に十分理解されなかった結果と考える。一方で、保護者の「満足度指数」は高かった。全保護者に配付した進路説明会資料の中で、「小学部から高等部までの積み上げる進路学習」について丁寧に説明した成果であると考え。今後は保護者だけでなく教職員に対しても、本校の進路学習についての研修・啓発に積極的に取り組んでいきたい。</p>	